

浦安

私の行った（震災発生から）2箇月後には、液状化現象に関する報道もほとんどなくなっていました。初日に浦和駅前に降り立ち大通りを歩くとほとんど震災の痕跡は見られなかったため、「被害はそれほど大きくなかったのか？」「既に復旧が完了したのか？」と思いました。

しかし、被害が大きかったといわれる住宅街地域（今川・舞浜地区）に入ると大通りには修復跡があり、道を一本入るとその区画全体が工事の真っ最中でした。

地中を走る道管が地盤の歪みによって破損した上下水道の補修（水道は3月中に、下水は4月15日に復旧したばかり）、傾いた電柱、家や塀、隆起・陥没した生活道路の補修工事がいたるところで行われていました。

浦安市職員の話では、梅雨が始まる前までに雨水が溜まる生活道路の陥没箇所修復を優先して完了したいとのこと。

公園や工場地帯の道路脇の歩道（歩行者が普段から少ない）は立ち入り禁止にするだけの手つかずの状態でした。報道はほぼ完全に終わりましたが、浦安での震災復旧工事が全て終わるのはまだまだ先のことであると感じました。

仙台・南三陸町

4日間一般のボランティアとして、現地のボランティアセンターに登録して作業をさせていただきました。

私が被害地域に入った瞬間の感想は、復旧作業が思ったよりも全然進んでいないというものでした。

特に、南三陸町では見渡す限りガレキの山で、その中にかろうじて道路の部分だけコンクリートが見えるといった状況です。

自衛隊や警察・消防、全国から公務員が集まり連日出動しているものの、人命救助のためのガレキ撤去はしても、被災者の生活・ライフラインの確保が優先であるためガレキや泥の片付けは一向に進まないようでした。

津波の威力が凄まじいことは既に報道等でご存知かとは思いますが、海岸線から数キロ離れた場所でも住宅の1階部分が浸水するような1～2メートルの津波被害に遭っています。

ボランティア3日目はその御宅の庭先に流れ着いたガレキの仕分け・撤去作業をしました。

よく見てもらえばわかるのですが、ただのゴミではありません。

通帳・アルバム・ベビーカー・靴下・歯ブラシ・・・

地震の威力だけを伝える報道写真では見えなかった、そんな細々としたものを仕分け撤去しながら、日常生活の全てが津波に飲み込まれたことを改めて認識させられました。

南三陸のような地域では過疎高齢化が進み、力仕事のできる世代が乏しいため、ボランティアは非常に喜んでいただけました。

テレビ報道から伝わってこなかったのは、臭いもそうです。

津波が運んできたヘドロから海水や石油・農業肥料などの混じった悪臭が漂い、道路で乾いたヘドロが作業車両などによって舞いあげられる砂埃とともに、悲惨さを伝えていました。

その海水や泥の浸水を受けた家屋では、一刻も早く泥を取り除いて洗浄しなければヘドロの臭いが染みつき、住めなくなるそうです。

ボランティア1日目の仙台では、悪臭と戦いながら民家の地下室や床下に流れ込んだヘドロを掻き出す作業をさせていただきました。

また、側溝の泥掃除をさせてもらった若者世帯（ボランティア4日目、南三陸町）でも、「家は自分たちで掃除したけど、それで疲れてしまって、側溝の臭いも気になったけど、やる気が起きなかったんですよ。ボランティアの皆さんに本当に助けられました」と言ってくださりました。

小さなことでも被災者の役に立てるんだと感じることができました。

ボランティアでさせていただいた主な内容は、民家の中や庭先、側溝などのヘドロの掻き出し、ガレキの撤去、救援物資の仕分け、あとは、南三陸町では泥の中から集められたアルバムなどの思い出の品の洗浄・保存作業なんかもやらせていただきました。

そのほかにも、子供やご老人の話し相手になることや、炊き出しやイベントの手伝いなど、様々な内容があり、例えば体力に自信がない方も大勢来ておられました。

一緒になった方で最も若かった方は今春大学を卒業された方、仙台市内から3時間かけて原付で南三陸町までこられていました。

年長の66歳の方は埼玉県から軽トラック持参で駆けつけられていました。

また、南三陸町のボランティアセンターで中心的な役割をになっている方は、なんと鹿児島から自家用車で乗り込み、2箇月間車で寝泊まりしてボランティアに従事していられるそうです。

これは報道でも言われていますが、現地復興に人手はまだまだ足りておらずボランティアは有効であると感じました。

ボランティアに行ける方にはどんどんと参加してもらいたいですし、実際には参加できない方であっても、周りでボランティアを考えている方がいらっしゃればそれを応援して下されば素敵だなと思います。

以上